

極寒の地で地球の謎を解く 南極地域観測隊

日本映画史に名を残す傑作のひとつに、蔵原惟繕監督の『南極物語』がある。1958年、第1次南極地域観測隊の越冬隊に同行したものの、撤退時、南極に取り残された二頭の犬、タロとジロが、極寒の地で生き延びる様を描いた作品だ。1983年に公開されたこの映画は、日本国内で1200万人を動員し、当時の歴代最高興行成績を塗り替えた。

映画の舞台である南極大陸は、過酷な環境のため20世紀に入るまで前人未到の秘境だった。日本の観測拠点である昭和基地で、夏は平均マイナス1度、冬は平均マイナス20度。ロシアのポストーク基地では、1983年にマイナス89・2度という、地球上でも最も低い気温を記録している。1911年12月、ノルウエーのロアル・アムンセンが人類で初めて南極点に到達し、その翌月には、初めて初めて白瀬瀧が南極大陸に上陸。以降、続々と各国の調査が入る。1957年、日本も第1次南極地域観測隊が砕氷船「宗谷」に乗り込み、南極に降り立った。

初代南極観測船となった「宗谷」は、もともとソ連から依頼を受け、貨物船「ポロチャエツ号」として製造していたものだ。1936年に進水するが、第二次世界大戦の影響で、ソ連に渡ることなく、商船として使用後、軍属船に。戦後は海上保安庁に所属し、南極観測船として第1、6次までの観測隊をサポートすることとなった。南極観測船の主たる役割は、観測隊と必要な物資の運搬。「宗谷」は昭和基地の設営や基地周辺の測量、

南極地域観測隊は地図の作成のほか、隕石の収集やオゾンホールの発見などの成果を上げた。1983年、「ふじ」はその役目を三代目南極観測船「しらせ」に渡す。南極観測船は2007年から二代目「しらせ」に代わり、現在も活躍は続いている。

船と展示物から 南極の魅力を知る

現役を退いた「ふじ」は、1985年からガーデンふ頭で当時の姿のまま係留一般公開されている。「ふじ」の係留場所には、カラフト犬が生まれた北海道、白瀬の出身地である秋田県など、いくつか候補があった。愛知県が選ばれたのは、歴史ある港があることや白瀬が豊田市で亡くなったこと、そして何より多くの人に見てもらえる期待からだ。その願いは叶い、オープン時には30万人もの人が見物に訪れ、29年経った現在までの乗船者は約761万人になる。



上) フィギュアで当時の様子を再現した調理室。船の揺れが激しい時は、濡れタオルを置いて食器の動きを抑えていたという。下) 土官用の船室では、娯楽に興じる姿も再現されていた

頭集 巻特 南極観測船「ふじ」

進路は南極大陸 氷の海を越えて

映画『南極物語』が公開された1983年、

南極地域観測隊の活動を支えてきた砕氷船が退役となった。第7、24次南極地域観測隊のため、

幾度となく日本と南極大陸を往復してきたその船は「ふじ」という。

二代目として初代「宗谷」から三代目「しらせ」へと

たすきをつないだ「ふじ」は現在、



左) 「宗谷」と比べて、高い性能をもつ「ふじ」だが、昭和基地に接岸できたのは18回中6回と、到達のむずかしさを物語る。接岸できなかった時は、すべての物資を空輸した。右) 「ふじ」の前の広場にあるタロとジロの像。ほかに「ふじ」のスクリューや、雪上車も置かれている

南極観測船「ふじ」

- 建造年月日 1965年3月18日
- 基準排水量 5,250トン
- 全長 100m
- 最大 幅22m
- 深さ 11.8m
- 最大速度 17ノット
- 主機形式 ディーゼル電気推進
- 軸馬力 12000馬力
- 搭載ヘリコプター 3機
- 定員 245人
- 砕氷能力 厚さ80cmまでの氷は連続砕氷可能



左) ヘリコプター格納庫を改装した展示室では、南極での観測の様子がわかる。また、運転免許証や新聞などの展示物、雪上車などが展示されている。中) ジョークでつくられた南極専用の運転免許証。[先住民(ペンギン等)に対する交通違反はその罪を2倍とする]と書かれ、笑いを誘う。右) 甲板には物資輸送に活躍したヘリコプターが展示されている

地形図の作成などに貢献した。映画『南極物語』で描かれた第1次越冬隊とタロ・ジロを含めたカラフト犬も、「宗谷」に乗って南極に降り立った。しかし、第2次越冬隊を乗せた「宗谷」が氷海で立ち往生し上陸を断念。搭載していた小型飛行機は、隊員を乗せるのが限界で、犬たちは首輪で繋がれたまま置き去りにされた。「宗谷」の砕氷能力・航空輸送力の不足が招いた苦い経験である。

「宗谷」から「ふじ」へ 南極観測のために建造された船

1965年の第7次南極地域観測隊から、「宗谷」に替わって「ふじ」が彼らを支える船となった。もともと、商船として建造された「宗谷」と違い、「ふじ」は南極観測のためにつくられた船。「ふじ」には、「宗谷」での経験が反映された。全長は78・3mから100mにのび、基準排水量は2倍以上となった。1基の小形ヘリコプターと2基の大型ヘリコプターを積載したことで、航空輸送力が高まり、洋上観測設備も充実。「ふじ」は南極観測船として誇るべき日本初の大型砕氷船であった。

特筆すべきは強化された砕氷能力である。「宗谷」は氷を砕く際、氷に体当たりして叩き割るチャージング以外に手段がなかったが、「ふじ」には船の前後左右に水のタンクがあり、それぞれのタンクから水を移すことで船体を持ち上げたり、揺さぶったりすることができる。氷の上に押し掛かるようにして前進することができるようになったのだ。

「ふじ」は第7、24次までの18年間、南極への困難な海路を往復。その間、

くるのは、第一甲板にある調理室。等身大のフィギュアが当時の状況を伝えてくれる。士官用の個室や医務室、乗組員が特別訓練を受けて散髪する理髪室なども、約5カ月及び南極までの道のりを船内で過ごした乗船者の様子をうかがわせる。「当時のものをそのまま残していることが最大の魅力です」と話すのは、名古屋みなと振興財団の山口真一さん。例えば、一般乗組員の居室のベッドには、家族や恋人の名前が書かれている。ヘリコプター格納庫だった場所は、現在展示室に改造されており、日本の南極観測で初めて導入された雪上車や物資輸送に使用された木製のそりなどが展示されていた。実際に「ふじ」に乗船していた南極地域観測隊のOBもたびたび訪れ、航海中に慣れ親しんだ場所や、士官用のスペースなど、入ることができなかった場所を見て、当時を懐かしんでいるという。

日本から南極大陸までの距離は約1万4千km。気軽に行ける場所ではないが、その旅を18年間続けてきた「ふじ」には、南極の酸いも甘いも刻みつけられている。「ふじ」を通して、南極を垣間見れば、南極の魅力に気付くかもしれない。



名古屋みなと振興財団の山口真一さん

● Information
名古屋海洋博物館
南極観測船「ふじ」
住所 名古屋市港区港町1-9
電話 052-652-1111
毎年冬にはオホーツク海に浮かぶ流氷に触れるイベントを開催。詳しくは、ウェブサイトへ。
www.nagoyaqua.jp/fuji/